

## 「詫茶の文化を考えるー捨ててこそその生き方ー」大船渡での文化講演会を終えて

(2018年6月9、10日)

グレイスハウス牧師 齋藤満

皆様のお祈りとご支援を感謝します。グレイスハウスの牧師、齋藤満(日本同盟基督教団)です。今年度も大船渡での文化講演会は盛況でした。昨年に続き、大船渡の表千家会長はじめ、お弟子さんたちが呈茶を手伝ってくださり、地元の方々25名、スタッフ含め31名が真剣に耳を傾ける講演会となりました。印象深かったのは、前の方に座っていた青年が、講演後も高橋先生のもとに行き、熱心に質問していたことです。彼は地元のお茶会に参加し始めたそうで、それまで全くキリスト教とお茶が繋がっていたとは知らずにこの講演に来たそうです。そして高橋

先生の文化講演を聞き、お茶と聖書や、福音というものが深く関係していることに興味を持ち、次回もこういう会があれば来たいと言っていました。

来年度はぜひ、大船渡の表千家の方々を中心に、この講演会を続け、それが教会ひいては福音への良き入り口となればと願っております。そして少しずつこの町の方々の教会に対する意識が変わり、いつか沢山の人がイエス様と出会えることを祈って今日も励んでいます。



グレイスハウス(伝道の拠点として齋藤師一家が居住)



講演会場のリアスホール

## 大船渡での奉仕 (2018年6月9、10日)

東日本大震災の被災地で、毎年、高橋敏夫先生の「文化講座」が開かれています。2013年6月、2014年6月、2015年7月、2016年8月と気仙沼市で4回、2017年8月、2018年6月大船渡市で2回開催されました。

高山右近、千利休他、歴史上の有名な人物が登場し、その人物たちがいかに聖書や当時初めて日本に伝わったキリスト教、そしてキリシタンと深い関係、影響を受けたかについて語っていただきました。毎回40～50名、時にはその倍くらいの方が参加してくださいます。(呈茶の関係で人数を制限していますが、いつも定員がほぼ満たされています) 講演の後の質問も活発です。日本のおもてなし文化の源泉のような茶道が、こんなに深く聖書の教え、言葉と結びついたとは、わたし自身にとって、また日本人クリスチャンにとっても驚きそのものです。

一般の方々にとっても同様で、改めて聖書に興味、

## 気仙沼聖書バプテスト教会 日出忠栄

関心をもつ機会となっていると思います。「人生について」「生と死」についてあなたはどんな覚悟で生きていますか？と講演の中で聴衆に問いかけがあります。自然災害や人災がひんぱんに起きる今、特に被災地の方々にとっては、この問いかけはタイムリーです。この講演会が、さらに被災地の多くのところで開催されることを願っていますし、また、被災地以外にも多くの所でこの文化講演会が開かれるよう、同じ思い、志を持つ協力者が各地に起こされることを期待しながら、これからも取り組んでいきたいと思っております。



## 茶道とキリスト教セミナー 茶会体験回想 (2018年10月8、9日)

阿部香織(求道者)

初秋の軽井沢で、高橋牧師から利休や右近の禁教の時代について学び、茶会を体験した。

利休は全てのひとが平等であるよう刀を持って入れない小さな茶室をつくり、右近は茶室を天国のような場所として清めたという。

濃茶では、カトリック、プロテスタント、求道者一同が、一つの茶碗から、よく練られた茶を服す機会に恵まれた。

次の炭手前では、死の象徴の炭が静かに横たわるのを見ながら、利休、右近、殉教又は潜伏したキリシタン、それぞれの死を思った。

炭手前の後、再び湯が沸いたので、薄茶を頂いた。すあまの菓子もちぎって口にしたら時、ほんのりとした甘さを感じ、湧き水で点てた美味しいお茶を服した時、生きている喜びを感じた。

最後は茶杓を手に取り、じっと見る。なるほど、牧師のいうとおり、竹の節と目は十字架のようにも、形は位牌のようにも見えた。改めて先人たちの存在を感じ、感謝した。



## 春日部市民文化講座に参加して (2018年9月26日)

山下康子(宮代町在住)

私が今まで参加させていただいた市民講座、とくに高橋先生の講座は興味深いもので、お話を聞いて後、利休の茶の湯に関する自分の従来の認識を考え直さざるを得ませんでした。

その主なるものは、利休の茶の湯にキリスト教が深く関与したと推測される事実や、極限まで簡素化された茶室は、亭主も客も単なる一人の人間となるよう諸々を捨て去り、共に茶を楽しみながら、心の交流ができる場であったという推測などを、何とか理解できたことです。

この講座は、私にとって異文化交流にも似た有意義なものとなっています。

